

十六アジアレポート 2017年11月号

2017年11月1日 十六銀行 法人営業部 海外サポート室

《目次》

1. 【上海】:『FBC 上海 2017 ものづくり商談会』を開催 上海駐在員事務所 浅野耕示
2. 【香港】:「日本秋祭 in 香港」 香港駐在員事務所 福井康幸
3. 【シンガポール】:「生き残りを賭けて」 シンガポール駐在員事務所 太田信治
4. 【カンボジア】:「最近のカンボジア進出状況」 バンコク駐在員事務所 西川貴之
5. 【ベトナム】:「ベトナム人の国民性について」 ベトナム投資開発銀行 ジャパンデスク 伊藤信介
6. 【インドネシア】:「整備が進むインドネシアのインフラ事情」
バンクネガラインドネシア ジャパンデスク 今井敦士
7. 【為替相場情報】

本書中の情報は情報提供のみを目的として作成されたものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては全てお客様御自身でご判断くださいますよう、宜しくお願ひ申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、当行及び執筆者はその正確性を保証するものではありません。また、本書中の情報は、法律上、会計上、税務上の助言を含むものではありません。法律上、会計上、税務上の助言を必要とされる場合は、それぞれの専門家にご相談ください。

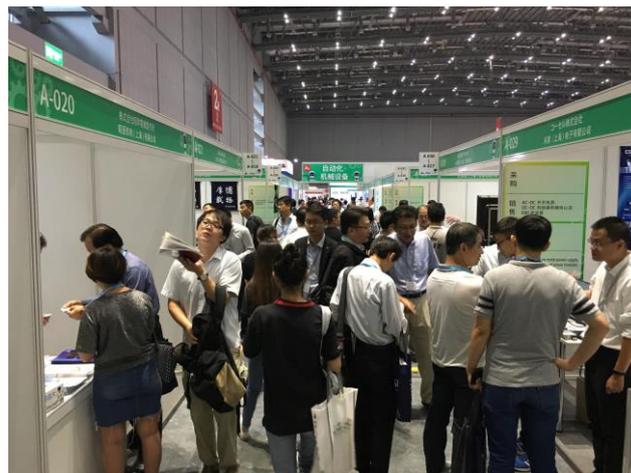
1. 上海:『FBC 上海 2017 ものづくり商談会』を開催」

上海駐在員事務所 浅野耕示

9月21日(木)から23日(土)の3日間、中国・上海市にて地方銀行・地方自治体など31団体合同で「FBC 上海 2017 ものづくり商談会」を開催しました。本商談会は日本の製造業向けの商談を中心としたイベントで、材料・部品の現地調達や、自社製品の販路拡大のために調達販売品を展示し、中国企業や在中国日系企業と商談する機会を提供するものです。

【商談会の概要】

本商談会には自動車部品や機械、電子関連、プラスチック、ゴム、原材料関連、工具等などの製造業や、ものづくり企業に有益なサービスを提供できるソリューション企業など462社(内、当行お取引先13社)が出展し、31,568名(同会場で開催の中国自動車部品交易会 CIAPE と合算)が来場しました。事前に聞き取ったマッチングニーズに基づいた出展企業間の個別商談として、25分の商談を1日で最大13件(最終日のみ5件)まで設定することができ、効率的に商談を組むことが出来る仕組みになっています。また、一般来場企業や出展企業間で自由に商談を行うこともでき、会期を通じて23,121件にのぼる活発な商談(名刺交換も含む)が行われました。



【商談の様子】

【参加企業の感想】

出展企業に感想をヒアリングしたところ、右記のように成果が期待されるとの声がある一方で、「中国の連休前で、土日を含んだ日程の設定がよくないのではないかと。来場企業が少なかった」との声もあり、日程設定や来場企業の誘致は今後の課題と言えます。

商談会終了後に行ったアンケートでは、出展企業のうち92%が「非常に役に立った」、「役に立った」、「まあ役に立った」と回答頂いており、商談会を新しい取引先発掘の機会として活用頂けたように思われます。

出展企業から頂いたコメント
好感触な販売先が3社ほどあった。
成約見込みが数件ある。
来場企業の調達ニーズに合致して、見積もりを依頼された。

【所感】

本商談会では名刺交換を含め、1社あたり平均50社と商談して頂いており、多くの企業との出会いの場となりました。こうした場合は、直接商売に繋がるマッチングのほか、情報収集の面でも、お役に立てるものと思います。今後も、中国ビジネスを展開するうえで、お役に立てる商談会や交流会を企画したいと考えておりますので、今後とも積極的にご活用いただきますようお願い致します。

2. 香港:「日本秋祭 in 香港」

香港駐在員事務所 福井康幸

蒸し暑い夏が終わり、香港も秋らしく涼しくなってきました。今、香港では“日本秋祭 in 香港”というロゴのついたイベントが数多く開催されています。これは、日本で秋にお祭や運動会、学芸会などが盛んに行われるように、香港でも短期集中的（10月から11月）に“日本”に関するイベントを開催し、日本をPRしようと在香港日本国領事館が企画したもので、昨年が続いて2年目になります。各イベントの内容は専用のホームページに集約され、統一されたロゴを使用します。場合によっては領事館の協力で香港政府の要人に出席を依頼することも可能です。専用ホームページでは「日本映画上映」「コンサート」「生け花展」「柔道教室」のような文化・スポーツのイベントから、「飛騨牛フェア」「北海道物産展」などの物販イベントまで100を超えるイベントが登録されています。日系企業だけでなく、現地経営の日本食レストランなどもイベントに参加しています。官民一体となった“日本”のPR月間というわけです。



【日本秋祭のロゴ】

十六銀行香港事務所では、野村証券の香港法人である「野村インターナショナル」が、香港の投資家など100人ほどを招待して開催した「Japan Hidden Destination」というイベントに他の17の地方銀行などと一緒に参加し、岐阜県の観光をPRしました。香港の日系の金融機関のほとんどは個人向け業務を行っておらず、こうした個人向けのイベントは単独ではなかなかできないのですが、こうして複数の機関と協力することでイベントが実現できることは大変有意義であると感じました。参加した投資家たちは「日本ひいき」の方が多く、知日派なのですが、各地方の観光や特産物などを紹介され、熱心に耳を傾けたりパンフレットを受け取ったりしていました。



【当行ブースで岐阜県の観光をPR】

来賓で出席していた在香港日本国領事館の松田邦紀大使兼総領事より「香港からの今年の訪日旅行者は9月末で168万人、最終的には230万人を見込んでいます。」というお話がありましたが、この「230万人」というのは人口の3割であり、さらに過去5年の日本への旅行者数を累計すると人口を超えることとなります。さすがに全員が日本に行くわけではありませんので、「リピーター」が多いということです。リピーターは日本の有名な観光地、東京、京都・大阪、北海道、沖縄などへの旅行は経験済みであり、最近の嗜好は「田舎」だそうです。高層ビルに囲まれた香港の毎日の生活から開放され、「のどかな田園風景をみてのんびりしたい」と思ったとき、日本はかなりの地方であっても道路など交通のインフラが整備されており、治安もよいため、個人旅行でも「田舎」に行けてしまいます。また、それぞれの地方には特産物があり、東京では買えないもの、食べられないものが地方にはたくさんあるということも地方へ旅行する理由だそうです。この「田舎志向」は、日本の地方都市が力をいれていることの一つ、「外国人に旅行に来てもらい地域の産品を購入してもらおう」というテーマにぴったりと当てはまります。香港は日本の地方創生にとっては最も重要な地域であることをあらためて認識しました。

3. シンガポール:「生き残りを賭けて」

シンガポール駐在員事務所 太田信治

本レポートの9月号で、シンガポールの空の玄関口であるチャンギ国際空港についてご報告しましたが、海の玄関口とも言えるシンガポール港もまた、世界最大級の港として知られています。ノルウェーのコンサルタント会社、メノン・エコノミクス

が今年4月に発表した世界の港湾都市ランキングでは、2012年、15年に続いて3回連続の総合首位となっています。今回は、そんなシンガポールの港湾に関する最新動向についてご報告します。

【2017年世界の港湾都市ランキング】

順位	総合	積み替え・出荷センター機能	海事金融・法律	海事関連技術	港湾物流機能	魅力・競争力
1	シンガポール	シンガポール	ロンドン	オスロ	シンガポール	シンガポール
2	ハンブルク	ハンブルク	オスロ	シンガポール	上海	オスロ
3	オスロ	アテネ	ニューヨーク	東京	ロッテルダム	コペンハーゲン
4	上海	ロンドン	シンガポール	上海	香港	ハンブルク
5	ロンドン	香港	上海	釜山	ハンブルク	ドバイ

出所:メノン・エコノミクス

1. 国際ハブ港

シンガポールは、アジアと欧州を結ぶ航路が必ず通る位置、つまり太平洋とインド洋を結ぶ貿易航路の要衝ともいえるべき場所に位置しています。この地理的優位性を活かし、古くから世界の中継港として発展してきました。2016年の世界港湾のコンテナ取扱量は、首位である上海の3,713万TEU(20フィート標準コンテナ換算個数)に次ぐ2位で3,090万TEUとなっていますが、その約9割が積み替えによるものであることが大きな特徴です。

【現在のシティ・ターミナル】



2. コンテナターミナル移設・集約計画

シンガポールの国際ハブ港に対する執念は非常に強いものがあります。現在、ケッペル、タンジョンパガー、ブラニの各ターミナルから構成される通称シティ・ターミナルと、そこから西へ10Km程の場所に位置するパシルパンジャン・ターミナルがありますが、シティターミナルの用地は2027年まで、パシルパンジャンの用地は2040年までを、それぞれリース期間として都市再開発庁(URA)から政府系港湾管理会社であるPSAコーポレーションが借り受けているものであるため、各期限に合わせ、現在建設中の島内最西端に位置するトゥアス・ターミナルに集約される計画となっています。新ターミナルの年間コンテナ取扱能力は6,500万TEUと、現在の4ターミナルの合計4,000万TEUを大幅に上回る見込みです。

【シンガポールのコンテナターミナル】



出所:PSA

3. 港湾政策に見るシンガポールの持つ危機感

国土面積が小さく、エネルギー資源にも乏しいシンガポールは、自らの利点である地理的優位性を最大限活用すべく、国際ハブ港としての地位を圧倒的なものにするため、集中的に投資を行っています。その姿勢はまさに、生き残りを賭けた強い危機感の表れだと言えるでしょう。

4. カンボジア:「最近のカンボジア進出状況」

バンコク駐在員事務所 西川貴之

先月、カンボジアの首都プノンペンを訪れる機会がありました。至る所でオフィスビルやコンドミニアムの建設工事が進められ、バイクやトゥクトゥクに取り巻かれながらロールスロイスやレクサスが走り去る街の様子から、騒々しくも、経済発展の途上にある強烈なエネルギーを感じました。日系企業の進出元年と言われた2010年以降、日系企業の進出はこの国の発展に大きく貢献してきましたが、ここへ来て、その進出状況は曲がり角を迎えています。

■日系企業の投資が激減

JICA カンボジア事務所でのヒアリングによれば、CDC（カンボジア開発評議会。タイのBOIに相当）へのQIP（投資適格プロジェクト）申請件数・金額は、2016年には17件・824百万米ドルであったものが、2017年は9月末現在で4件・8百万米ドルに急減しているとのことです。

投資が急減した背景には、人件費の急激な上昇が挙げられます。カンボジアの最低賃金は2012年には月額61米ドルでしたが、2017年現在は153米ドルとなっており、2018年には170米ドルへ引き上げられることが決定しています。一方で、隣国ベトナムの最低賃金は、2017年は米ドル換算で約110～165米ドル（地域別）となっています。これまで、周辺国に比べて圧倒的に安い労賃がカンボジア投資の最大の魅力でしたが、特にベトナムとの比較においてはその優位性はほとんど無くなってしまいました。実際、ベトナムとの国境の町バベット周辺の工業団地では、日系に限らず中国、韓国の縫製業者にも撤退する動きがみられるようです。通関に係るコストや物流コスト、リードタイムを考えれば、「工場はカンボジアではなくベトナム」となってしまうのでしょうか。

製造業以外では、2013年～2014年にかけて日系飲食店の出店ブームがありました。一時はプノンペン市内に160店舗程あったといわれていますが、現在は半減しています。ブーム当時はイオン進出が大きく取り上げられ、テナント入居を見据えたテストマーケティングの動きもあったようですが、在留日本人が約3,000人にすぎないことから、やはり飽和状態にあったものと考えられます。一般のカンボジア人も、まだまだ気軽に和食に手が出る所得水準ではなかったのでしょうか。

また、2014年以降は、マイクロファイナンス事業の進出が増加しましたが、今年4月から貸出上限金利が18%に規制されたため、進出の動きは止まっています。事業者の多くは、20%程度の金利で資金調達し30%程度で貸し出すビジネスモデルであったといわれています。

■今後の見通しは？

カンボジアの人件費は、タイとの比較においてはまだまだ優位性があります。タイは目下、EEC（東部経済回廊）構想を打ち出し、工業化のすすんだタイ東部3県のさらなる産業高度化を図っています。EEC進展の過程で省力化・省人化できない部門を国外へ移管する、いわゆるタイプラスワンの動きが加速した場合、タイとの国境の町ポイペト周辺の工業団地は、その受け皿となる可能性を十分に秘めています。

今年は製造業の進出が低調である一方で、銀行、保険、リース、教育など、大型のサービス業が進出を果たしました。中国資本の開発によりプノンペン市内の地価は40～50倍に上がったと言われており、富裕層は確実に増加しているようです。彼らの需要を取り込むべく、今後は、教育、医療、旅行、娯楽、飲食等で、日系中小企業にもビジネスチャンスが生まれてくるかもしれません。

5. ベトナム:「ベトナム人の国民性について」

ベトナム投資開発銀行 ジャパンデスク 伊藤信介

ベトナムへ進出している日系企業は、ここ数年で大きく増加しています。日本の外務省領事局政策課が発表した「外在留邦人数調査統計」における、海外進出日系企業の調査結果によると、2016年10月1日時点でのベトナム進出日系企業数は1,687拠点で、2007年の820拠点と比べて約2倍に増加しています。日本へ来るベトナム人技能実習生も年々増加しており、ベトナム人スタッフと働く機会が増えています。そのような状況の中で、ベトナム人スタッフと円滑に業務を進めていくためには、ベトナム人がどのように感じ、考えているかを理解することが重要となってきます。今回は、そんなベトナム人の性格や国民性について紹介していきたいと思います。



【ベトナムを象徴するバイク社会の様子】

ベトナム人の国民性として、よく言われているのが「4K」です。これは、「器用」「向学心旺盛」「近視眼」「カカア天下」の頭文字を取ったものです。この国民性についてはそれぞれ、ベトナムが経てきた歴史が大きく関係しています。

器用さについては、ベトナムは歴史的に手工業が発展しているため、器用な仕事に就く人が多く、その関係から器用な人が多くなったと考えられています。現在のベトナム進出日系企業でも、縫製工場や繊維工場などでその器用さが生かされています。

向学心旺盛なことは、儒教圏の人の共通点とも言えますが、ベトナム人は非常に向上心の強い人が特に多いと言われています。仕事や学校が終わった後に語学やビジネスの夜間学校に通い、自らのスキルアップを目指している人が多いようです。自らのスキルを磨くことで、より好待遇な企業へ就職することが、最近のベトナム人スタッフのスタイルとなりつつあります。

近視眼というのは、目先の利益を優先させる、という意味です。極端な例えをすると、「1年先の100万円より、今日の100円」という考え方の人がかなり多くいます。この考えには、ベトナム戦争が関係していると言われています。長く厳しい戦争が続き、将来が見えず、今日の生活を維持するのでやっとという状況であったことから、未来の不確定な利益より、今確実に得られる利益の方を優先させる、という考え方が浸透しています。ですので、ビジネスにおいて、未来の利益のために今は損を取る、という話をしても、ベトナム人にはなかなか理解されない傾向にあります。

カカア天下というのも、戦争が大きく影響しています。男手は戦争に取られ、家を守るのは女性の役割となったため、家での女性の権力が強くなったようです。また、戦争後の経済発展を支えたのが女性だった、という事情もあります。勉強好きなのも女性が圧倒的に多く、実際、事務管理系の人材の9割は女性で占められています。

4Kのほかにも、「真面目で勤勉」、「プライドが高い」、「協調性がある」などが、ベトナム人の国民性を表す際によく使われるキーワードとなります。

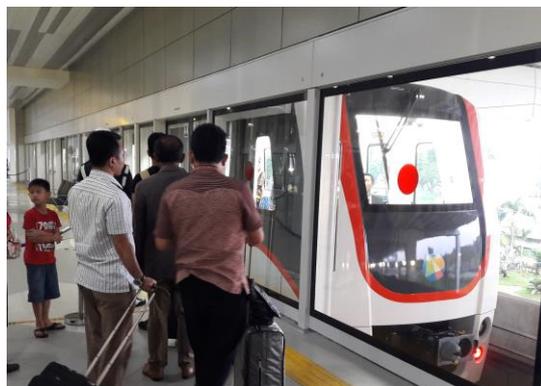
実際にベトナム人スタッフと働いたことのある方は、感覚が合わず、戸惑った経験が何度もあるのではないかと思います。ベトナム人と日本人は道徳観、人生観、価値観などでかなり似通っているところもありますが、上記のように違う国民性ももちろんあり、すぐには理解し合えないかも知れません。そういった時には、お互いに「当たり前」という考えを捨て、それぞれの国民性を尊重することから始めると、より円滑に業務を進めることができるのではないかと思います。

6. インドネシア:「整備が進むインドネシアのインフラ事情」

バンクネガラインドネシア ジャパンデスク 今井敦士

インドネシアの首都であるジャカルタにおいて、近年インフラ整備が活発に行われています。今回は、そのうちのいくつかをご紹介しますと思います。

海外から当地へ訪れる際、最初に目にするのがジャカルタの玄関口、スカルノハッタ国際空港です。空港のターミナルビルは3つで構成されており、ターミナル1が国内線、ターミナル2が国際線、ターミナル3が主にLCCの乗り入れとなっていました。2016年8月には、ターミナル3が改修工事の末に部分開業し、2017年5月には国営のガルーダ・インドネシア航空の全ての国際線が、このターミナル3に移転されました。現在、スカイチームに加盟している航空会社も一部移転されています。また、2017年9月からは、ターミナル2とターミナル3を結ぶ無人輸送システム「スカイトレイン」が開通し、渋滞に巻き込まれることなく、快適な移動が可能になりました。私も実際に乗ってみましたが、提示時刻通りに運行されており、今後ますます便利になっていくことと思われます。



【ターミナルを結ぶスカイトレイン】

空港を抜けて市内に入っていくと、ジャカルタの交通渋滞を目にする機会が多くなります。当地に暮らす私たち日本人駐在員にとっても、この渋滞は悩みの種です。そこで、この交通渋滞を解消すべく、現在、LRTとMRTの工事が進行しています。

LRTとは、インドネシア・ジャカルタ都市部の軽量鉄道プロジェクトのことです。ジャボデタベック（ジャカルタ、ボゴール、デポック、タンゲラン、ブカシなどジャカルタ周辺地域の頭文字をとった通称）と呼ばれ、完成すれば都市圏を結ぶ利便性の高い公共交通機関となります。2018年のアジアスポーツ大会までの一部路線開通を目指し、現在都市部近郊で工事が進められています。

また、LRTが地上の鉄道プロジェクトであるのに対し、MRT（大量高速交通システム）という地下鉄プロジェクトも工事が進められています。完成すれば、地上の交通渋滞に影響されることなく都市部を移動することが可能になる為、大変便利な公共交通機関の一つになり得ます。

LRT・MRTの工事が佳境を迎えている現在、車線の減少が更なる渋滞悪化を招いていますが、いずれも計画通りに進めば、今後数年の間に完成し、インドネシア・ジャカルタの交通事情を一気に変える可能性を秘めています。

この他にも、日本と中国の間で激しい受注競争が行われたことで有名になった、ジャカルターバンドン間を結ぶ全長143.2kmの高速鉄道計画も進められています。この計画については、最終的に中国が受注し、現在土地の収用が行われている段階です。具体的な工事は着手されていない為、完成までにはまだ時間を要するものと思われます。



【ジャカルタ市内、LRT工事の様子】

国や市などの自治体に十分な資金力が無い為、しばしば工事が遅れることもあるインドネシアですが、工事が完了し、ますます便利な社会になっていくことが大きく期待されています。

7. 為替相場情報

(1) 人民元一円為替相場(中国人民銀行公表仲値)

(単位:1人民元当たりの日本円)

(月)		(火)		(水)		(木)		(金)	
9月25日	17.04594	9月26日	16.89646	9月27日	16.94685	9月28日	17.00304	9月29日	16.92362
10月2日	-	10月3日	-	10月4日	-	10月5日	-	10月6日	-
10月9日	16.90760	10月10日	17.00420	10月11日	17.06601	10月12日	17.08613	10月13日	17.03723
10月16日	17.00189	10月17日	17.02446	10月18日	16.98370	10月19日	17.08847	10月20日	17.03374



上記表、及びグラフはこの公表仲値を便宜的に1人民元当たりの日本円へ換算し直した相場です。

そのため、正式な人民元相場が必要な場合は、中国人民銀行にお問い合わせ下さい。

(2) ドルー円為替相場(当行公表仲値)

(単位:1ドル当たりの日本円)

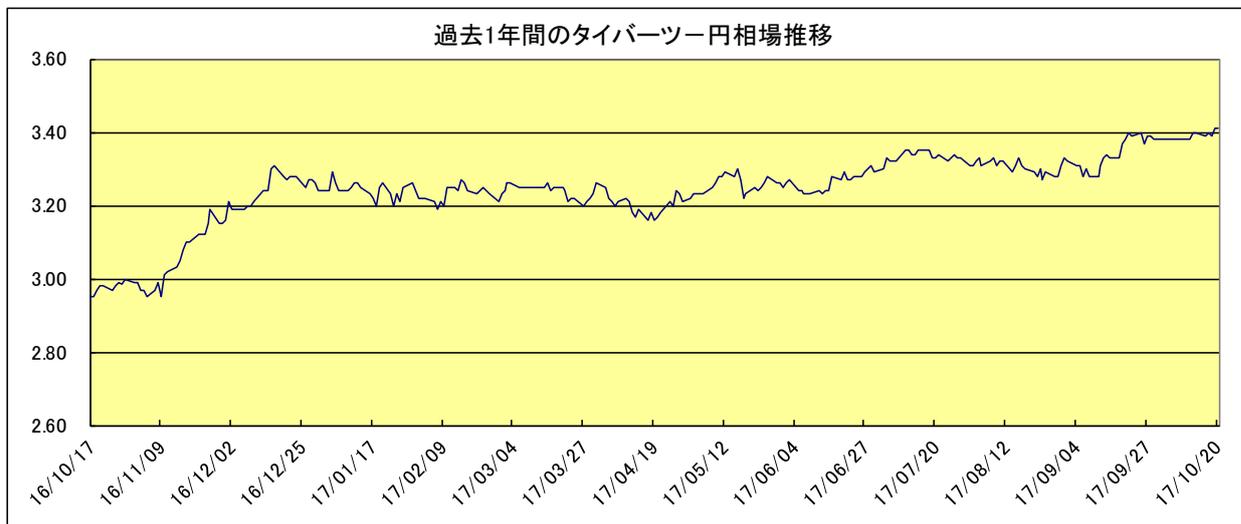
(月)		(火)		(水)		(木)		(金)	
9月25日	112.53	9月26日	111.55	9月27日	112.39	9月28日	112.95	9月29日	112.73
10月2日	112.78	10月3日	112.97	10月4日	112.60	10月5日	112.81	10月6日	112.90
10月9日	-	10月10日	112.76	10月11日	112.31	10月12日	112.45	10月13日	112.29
10月16日	112.08	10月17日	112.24	10月18日	112.21	10月19日	112.99	10月20日	112.77



(3) タイバーツ-円為替相場(当行公表仲値)

(単位: 1バーツ当たりの日本円)

(月)		(火)		(水)		(木)		(金)	
9月25日	3.4000	9月26日	3.3700	9月27日	3.3900	9月28日	3.3900	9月29日	3.3800
10月2日	3.3800	10月3日	3.3800	10月4日	3.3800	10月5日	3.3800	10月6日	3.3800
10月9日	-	10月10日	3.3800	10月11日	3.3800	10月12日	3.4000	10月13日	3.4000
10月16日	3.3900	10月17日	3.4000	10月18日	3.3900	10月19日	3.4100	10月20日	3.4100



(4) インドネシアルピア-円為替相場(参考値)

(単位: 100ルピア当たりの日本円)

(月)		(火)		(水)		(木)		(金)	
9月25日	0.8500	9月26日	0.8400	9月27日	0.8400	9月28日	0.8400	9月29日	0.8400
10月2日	0.8400	10月3日	0.8400	10月4日	0.8300	10月5日	0.8400	10月6日	0.8400
10月9日	-	10月10日	0.8300	10月11日	0.8300	10月12日	0.8400	10月13日	0.8400
10月16日	0.8300	10月17日	0.8400	10月18日	0.8300	10月19日	0.8400	10月20日	0.8400

